

魅力たっぷりベナンのパイナップル

在ベナン日本国大使館

亜熱帯気候のベナン南部では、トロピカルフルーツの代表格であるパイナップルの生産が盛んです。

その起源は、アガジャ (AGADJA) 王統治下の奴隷時代 (1708~1740 年)。その後、1972 年にベナン南部アトランティック県において民間団体の主導の集中生産が始まり、パイナップル栽培に従事者する人々は、工夫しながら生産を続けてきました。ベナンでは、当時から多くの作業が農機を使うことなく人力で行われており、今日では 10 万人近くの人々が生産・加工・輸送など、様々な生産過程に携わっています。



(パイナップル畑)



(成長中のパイナップル)

ベナンで一番の生産量を誇っているのは、アトランティック県。ベナン産パイナップルの約 80%は、同県で栽培されており、その畑面積は 2,000 ヘクタール (東京ドーム約 427 個分) に及びます。時期や購入場所にもよりますが、直径約 20cm のものが 1 つ 150 フラン CFA (約 30 円) 程度、豊作期には、1 つ約 90 フラン CFA (約 18 円) で購入できることもあります。また、アトランティック県を起点として隣県に生産技術が伝播したことで、ベナン西南部クフォ (Couffo) 県及びモノ (Mono) 県、中南部ズー (Zou) 県、東南部プラトー (Plateau) 県においてもパイナップルの生産が普及しています。

2000年のベナンの総生産量は51,000トンでしたが、2020年は362,964トンで、2000年と比較すると約7.1倍も増加。日本の農林水産省によれば、日本のパイナップル産地である沖縄県の2019年の年間生産量は7,460トンであったので、ベナンは日本の約46倍の生産量を有していることになります。

ベナン産パイナップルの17%は地産地消されていますが、27%は工場で加工の後販売され、綿花、カシューナッツに次ぐ第3の輸出物として、54%はナイジェリアを中心とした近隣諸国へ、残りの2%はフランス、ベルギー、イタリア、スイス、スペインの他、マグレブ（リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコなど北西アフリカ諸国）へと輸出されています。（2020年、ベナン農業・畜産・漁業省）

在ベナン日本国大使館においても、公邸会食に使用されるなど、積極的に外交活動にも利用されています。



（写真：在ベナン日本国大使公邸料理人 岡本純シェフが魅せるベナン産パイナップルを使った料理；左：パイナップルのコンポート；右：パイナップルのグリル）

パイナップルの生産量は、ベナンの国内総生産（GDP）の1.28%（2020年時点）を占めるに過ぎませんが、芯まで食べられるベナンのパイナップルは世界に誇れる魅力を備えています。